

---

# 機動戦士ガンダム～小さなニュータイプ～

アスタル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムく小さなニュータイプく

### 【Nコード】

N8507Z

### 【作者名】

アスタル

### 【あらすじ】

神谷悠斗は一人の男の子を救って死んだ・・・はずだったのだが、目覚めると、目の前にはセイラ・マスとその背後にはMS-06ザクとRX78-2ガンダムが佇むサイド7だった・・・。  
そこで神谷悠斗はアステル・ロアと名乗り、一年戦争を戦うことになる・・・。

## 人物・機体紹介

人物・機体紹介

オリジナル主人公

名前：神谷 悠斗 アステル・ロア

年齢 15歳

身長 165.2cm

体重 50.3kg

髪型：金髪でやや長髪

顔： toaの短髪ルークの顔

好きな事：機械いじり 掃除

嫌いなもの：平和を乱す物

搭乗機体

RX78-1 プロトタイプガンダム

機体情報

額のV字型ブレードアンテナや、人間の目を模した複眼式のセンサーカメラが特徴

前腕部 一部凹んでいる所に専用のビームライフル固定

足首 カバーにスリットが3本入れられている

コアブロックシステム未完備（後に完備）

#### 基本武装

頭部 60mmバルカン砲

左腕 ビームライフル

右腕 ガンダムシールド

背部 ビームサーベル

#### 代替武装

左腕 ハイパーバズーカ、ガンダムハンマー



## サイド7(前書き)

完全に衝動で書いた自己満足小説です。こんなガンダムじゃない！という方はお引き取りください。それでもよろしいという方のみどうぞ

## サイド7

俺の名前は神谷悠斗 工業系の高校に通ういわゆる学生だ。

学校から自宅に帰るまで散歩を楽しみ、家に帰って眠るという普通の日常を送っている。

そんな当たり前の日々がこれからもずっと続くのだと思っていた。そうあのときまでは……。

その日、自宅に帰る途中だった俺は目の前の交差点を走って渡って行く男の子を見かけた。それだけならたまにでもみる光景だった。

しかし、折悪くスピードを出した車がこちらへ突っ込んで来る。

「危ない！」

俺は無意識の内に交差点の男の子の所へ走って、なんとか男の子を突き飛ばす事出来た。

しかし、俺は逃げる事が出来なかった……。

視界がブラックアウトする。

そこで俺の意識は途絶えた。

「……きて、しっかりして。」

女の人の透きとおるような美声が脳内に響く。

俺は静かに目を開ける……

？

ココハドコデスカ

アナタハドチラサマデスカ

驚くのも無理は無い。

目の前の人物はなんと機動戦士ガンダムの登場人物（と、いうか主要人物）のセイラ・マス、そして目の前に広がる光景は、やはり「機動戦士ガンダム」で見たことのあるMS06-ザク？（以後ザクと呼称）二機の襲撃を受けているサイド7

「良かった・・・。目が覚めたのね。さ、ここはあぶないわ急いで向こうのシェルターへ」

セイラさんに言われるがままその後を追おうとしたその時、俺の脳裏に、ザクに襲われ機体を捨てて逃げるパイロットの映像が閃いた！。

いけない！

俺はきずけば足の向く方向へセイラさんがとめるのも聞かずに駆け出して行った。

あのザクがここに来れば間違いなくサイド7が無くなっちゃう・・・

俺は、漠然とだがそう感じ取る事ができた。

俺は乗り捨てられたMSを見上げる。

RX78-1 プロトタイプガンダム（以後「プロトガンダム」と呼称）

本来の歴史には登場しないはずの機体、そして先ほど見た二機のザク以外のもう一機のザク

もうやる事はわかっていた。

俺はハッチが開いたままのコクピットに座る。

「マニュアルがあるはずだ……。」

俺が自分の足元にそれを見つけ、手を伸ばそうとしたそのとき……。

頭に何かが生と一緒の流れこんでくる。

……うっ、この声は、何だ？ でもこれで……。

俺は足元のマニュアルから再び視線を正面に向け、落ち着いてプロトガンダムを起動させてゆく……。

ザクがヒートホーク片手にこちらへゆっくりと近づいてくる。

「間に合うか……、よしいくぞ」

沈黙していたプロトガンダムが動き出す。

それを見たザクのパイロットは、

「あ、あのMSあれだけザクマシンガンをくらってまだうごけるのか、ば、化け物めええ！」

そう叫びながら、ヒートホークを振り上げ、迫ってくる！

ヒートホークが振り下ろされる刹那、俺は機体にスウェーバックをかけ、攻撃をかわした。その瞬間、背中のレストランからビームサーベルを引き抜き、相手のMSが空立ちになったのを見計らって、コクピットに向かって、思い切りビームサーベルを突き刺す！

「シャ、シャア少佐。ぐがあああああ」

パイロットの断末魔！、俺には相手のパイロットの死の瞬間が見えた！

おもわず手で顔を覆うが、このビジョンは脳裏に焼き付いたまま消えてくれない。

「こうするしかなかった……。でも、やっぱり気持ちのいいものじゃないな。」

ザクを撃破して、そんな事を思いながら、俺はしばし呆然としていたが、やがて先ほどのMS戦闘が終わっているであろう俺がもっていた場所に向かった。これからどうなっていくのか、自分がした事によりこれから自分自身に起こる事、俺にはそれがしっかり認識できていた……。



## サイド7（後書き）

自分が思い浮かんだ事をそのまま本能で打ち込んだだけです。予想よりはるかにつまらないという方本当にすいません。こんな小説でよろしければお付き合いください。

## 赤い彗星の脅威（前書き）

今回はシャアの視点でも書きました。最初のシャアとの戦闘です。

## 赤い彗星の脅威

ムサイ級旗艦型軽巡洋艦ファルメル

この艦の艦橋には赤い軍服と仮面をつけた男シャア・アズナブルと軍服を着た小太りの男ドレンが今後の作戦について話し合っている。

「偵察に出したザクが全滅しただと？」

「はっ、スレンダーの最後の報告によれば命令違反を侵したジーンをデニムがおさえきれなかったため、デニムもなし崩的に戦闘に参加し、スレンダーもやむなく戦線に参加した直後にやられたようです。」

「一挙に3機ものザクを失うとはな。やはり連邦軍の開発したMSの性能は我々のMSザクなどは比べ物にならないくらいの性能のようだ。でなければ、一挙に3機ものザクを失うなど認める事はできませんよ。」

「どうなされます？。」

「ふむ……、ドレン、レーザー通信回路を開け。ドズル中将にだ。」

「はっ。」

レーザー通信回路が開き、ドズル・ザビ中将の不機嫌そうな顔が映像に映る。

作戦終了祝いのせつかくの晚餐の支度が無駄になったとご立腹であ

つたがシャアからV作戦の事を聞くと目の色を変えて話に乗ってきた。

「何、V作戦だと?。」

「はっ、連邦軍の新型MS、並びにそれに伴う新造戦艦の開発計画です。作戦終了後の、帰還途中これを見いたしました。つきましては帰還途中でありましたので、武器弾薬が底をについておりまして・・・。」

「補給が欲しいのか?。」

「それとザクを5機。」

「MSザクを5機も失ったのか!、貴様ほどの者が。」

「中将、連邦軍のMSはそれほどの性能を有しているのです。その証拠に5機のザクのうち4機は連邦軍のたった1機のMSに・・・。」

「む・・・、よしザクを回す。V作戦の情報は何でもいい、手に入れる。それとそのMSを破壊もしくははできるならば捕獲するのだ。」

「はっ、やってみます。」

「それでこそ、シャアだ。」

レーザー通信回路が閉じると、シャアはすぐさま次の行動に移る。

「ドレン。私はサイド7に潜り込む。」

「シャア少佐お一人でありますか？。それに補給は・・・」

「戦いとは常に二手三手先を読むものだ。偵察部隊が戻らないのだ。補給を行い戦闘するにも情報は必要不可欠なのだ。だから私が行くのだ」

「はっ。ご武運を。」

シャアがサイド7に侵入すると、荒野と化したコロニー、MSのパーツらしき物

が見られる。それを一通り写真に収め、調べていると、シャアに向け銃を向ける少女セイラの姿。

シャアが、銃を捨てて手を挙げ降参の意を示すと、セイラが唐突に喋り出す。

「ヘルメットを取ってください。そして後ろを向ってください。」

む、似ているアルテイシアに。そう思いつつも言葉には出さずヘルメットを取り、マスクを外すシャア。その素顔にセイラは見覚えがあった。

「キャスバル・・・兄さん。」

「やはりアルテイシアか・・・、妹よ。お前はテキサスコロニーにいるはずではないのか？」

「兄さんこそ、どうしてジオン軍に・・・。」

「父、そして母の無念を晴らすため、身分を隠しているのだ。それ

よりアルテイシアおまえは・・・」

その瞬間、シャアの立ち位置より少しずれた地点にビームが走った。ガンダムである。見つかった！シャアはWBのクルーの銃撃をかわしながら出口へと急ぐ。が、銃撃がカメラに被弾する。

「しまった。チィッ！」

しかし、悠々と引き上げるシャア。WBのクルーはそれを眺めるしかなかった。

ファルメルに戻るとシャアはすぐさまMSデッキに入り、

「ドレン、潜入は失敗だ。私のザクを第一線装備で射出しろ。こうなれば直接連邦軍のMSの性能を見せてもらう。」

「またお一人ですか。」

「今回は相手の力量を見るだけだ。連邦軍のMSの性能を見たらすぐに退く。心配はいらん。」

「分かりました。シャア少佐がMSで出られる。シャア少佐のザク用意！」

射出されたザクに搭乗したシャアが呟く。

「見せてもおうか。連邦軍のモビルスーツの性能とやらを・・・。」

と・・・。

今まさに出港したWBに警報が走る!どうやらシャアがMSでせめてきたようだ。

「MS一機こちらに向かってくる!。」

「ザクではないのか?」

「し、しかしこのスピードで動けるザクは存在しませんよ!。」

「シャア……。赤い彗星のシャア。」

俺がブライトに呟く。

「分かるのか?」

「おそらく、MSでこちらの実力を伺いにきたんだと思います。」

「。。。。。」

「今回はおそらく様子見だと思えます。だから。。。。。」

「ガンダム、発進準備!。」

「ブライトさん!。」

「言ったはずだ。私はお前を信用したわけではない。」

「・・・」

信用されていないのはわかっているけど、やっぱり聞いちゃくれなかったか・・・。

（回想）

もといた場所に立ち返ると、俺が搭乗しているプロトガンダムとは異なる白・赤・青のトリコロールの2号機RX78-2ガンダム（以後ガンダムと呼称）とその足元に倒れるザク一機、そして目の前に広がる爆発により生じたであろう大きな穴が、サイド7がこの戦闘でどうなったかを物語っていた。

「やはりこうなったか、これでサイド7に住む人々は・・・」

例え、ここにいっても何もできなかっただろう。それは分かっている。悪いのはコロニーで戦闘を仕掛けてくる連中だ。でもコロニーの破損による難民の発生、それによるおびただしく発生する死者、その事実を決して理屈だけで割り切れるものではなかった。

俺がそんな事を考え、俯いているとONになった外部スピーカーからやけに若々しい、俺と同じ年ぐらいであろう少年の声が届く。

「そのガンダムのパイロット、僕はアムロ・レイです。聞こえていたら応答をお願いします。」

「あ、ああ俺は、・・・アステル・ロアだ。君も・・・ガンダムにのっているのか。」

本名は伏せて、その場で思いついた名前を名乗る。

「無事な人が一人でもいてよかったです。こちらに避難民が避難しているWBがあります。まずはそれと合流しましょう。」

アムロの乗るガンダムについていくと、やはりよく見知っているペガサス級強襲揚陸艦WBが姿を現す。

アムロが搭乗するガンダムに通信がつながる。応答したアムロは自分がガンダムの性能のおかげでザク2機を撃破した事を伝えた。俺も通信をつないでもらい、プロトガンダムに搭乗し、ザク一機を撃破した事を伝えた。こちらにつながっている通信の声を聞くと驚きを隠せないようだった。

当然だ。俺もアムロも子供の身でガンダムを操縦しただけでなく、ジオンのザクを撃破したのだから。

さらに、俺がプロトガンダムのパイロットが死んだと伝えると（逃げたと伝えるのはさすがに酷だと感じた。）ガンダムのパイロットも戦死していたようで、予想していた通り、暫定的にはいえ俺とアムロは現艦長の頼みでガンダムのテストパイロットとなった。

プロトガンダムから降りて、艦長室に向かう俺に対して、WBの艦長が先頃死んでしまったため、こちらも暫定的にはいえ艦長になったブライト・ノアが俺に問い詰めるように質問してきた。

「アステル・ロア、いやおそらく偽名だろうが、貴様は一体何者だ。」

ああ、やっぱり来たか。俺はこの世界の人間ではないのだから、俺の身元など調べた所で出てくるはずがないのである。身元の分からぬ物は敵のスパイか何かだと疑うのがこの状況では常識だろう。敵のスパイと疑わしい者を仮にも自分が運用する艦に乗せたくはないだろう。この質問は至極当然といえた。

「何者か分からなければどうするんです。俺をプロトガンダムから降ろして拘束するんですか？」

俺は質問に対して、質問で返す。

「くっ、そうしたいのはやまやまだが、いまWBにはMSを操縦できるのはアムロとお前しかいない。このWBをジャブローに入港させるまでは貴様の事は考えさせてもらうさ。」

「ザクを何機か落とせば、俺のスパイ容疑は晴れるんですか、ブライトさん？」

「自分の立場が分かっているのならせいぜい努力するのだな。そうすればお前を信用できる日もくるだろう……。」

と、俺とブライトの間にはこんな事があってブライトは俺を一切信用していないようだ。（当然だとは思いが……。）

「発進だ。アステル聞こえなかつたか？」

「・・・アステル・ロア、プロトガンダム出る。」

「アムロ 行きまーす。」

プロトガンダム、続けてガンダムが射出される。シャアが通常の3倍に恥じぬ速さでこちらに迫ってくる！

「こさせるか！」

まずガンダムがビームライフルを放つが、ザクは左方向にスライド移動して回避し、回り込むようにガンダムの背後へ移動する。

「メ、メガ粒子砲！何ということだ。連邦軍のMSは戦艦の主砲並みのビームライフルをもっているのか。しかし、当たらなければどうということはない。」

ザクがガンダムに照準を合わせ、ザクマシンガンを放つ瞬間！

「今だ！」

ビームライフルを構え、チャンスを待っていた俺はビームライフルを放つ！

だが、ザクはこちらに即座に照準を合わせ、回避運動を行いながらこちらにザクマシンガンを放つ。

間に合わない！俺はとっさに盾をかまえるが、間に合わず半分ほどはくらってしまふ。

「馬鹿な、直撃のはずだ。ええいこちらの武器では相手のMSの装甲を貫けぬとでもいうのか。」

ザクがヒートホークをかまえ、ガンダムに急接近する！

だが、ガンダムはバーニアを点火、上昇してザクから距離をとりながら牽制に頭部バルカンを放つ。

「な、なんとという運動性だ。どうやら連邦軍のMSは火力、運動性、装甲、全てにおいてザクを遥かに上回る機体のようだ。これならデニム達がやられたのも頷ける。しかし！」

ザクは頭部バルカンが被弾するのもかまわず突進する。

「させるか！」

俺は牽制にビームライフルを連射する。しかし、ザクは機体を急上昇させ、すぐに。体制を持ち直す。

「あの黒い奴のパイロットは落ち着いているようだが、まだ腕がついていつていない。白い奴は黒い奴より腕は上だか戦場の空気に慣れていないらしい。どちらも一機ならばどうということはない敵だが、二機相手ではな。さて、どうしたものか。連邦軍のMSの性能は十二分に見せてもらった。引き際か……。」

そんなとき、ドレンから通信が入る。

「シヤア少佐、御戻りください。ドズル中将から補給の連絡が入りました。」

「了解。ちょうど引き上げようと思っていたところだ。」

シヤアは俺たちに余力がないと見るや、悠々と退いて行った……。

俺はプロトガンダムのコクピットで大きく息をはく。見事に遊ばれたな、俺もアムロも。死ななかつたのはガンダムの性能のおかげだ。分かつてはいたが、これから戦わねばならぬ敵に対して俺は脅威を覚えた。

ガンダムとプロトガンダムを着艦させ、艦長室に向かうと、待っていたのはブライトのアムロに対する説教と、俺に対する俺への不信感がさらに増えたという言葉であった。

「パイロット兩名、ガンダムの性能を当てにしすぎだ。試作機には余分なパーツはないのだぞ。戦いはもっと有効に行え！」

アムロが顔を歪める。

「な、何だって。」

「こついわざる負えないのが今の我々の状況だ。それが理解できないのなら、今すぐにでもサイド7へ帰れ！」

「ぼ、僕はあなたが……。」

「ああ、憎んでくれてかまわんよ。」

「それにアステル、貴様への疑いがますます濃くなった。なぜシヤアがくるのが分かった。それに大した八百長試合だったな。ガンダ

ムの性能を向こうに教えるのが目的か？」

俺はムツとなったが、こらえた。俺の身元が分からないもは事実だから。疑われているのだからこれくらいは言われるだろうと覚悟はしていた……

だが、手を出しかけたのは俺ではなくアムロの方だった。俺は慌ててアムロを羽交い絞めにする。

「アムロ、寄せ！」

「どうして！アステルは精一杯戦ってきてあんな事言われて悔しくないのかよ！」

「俺の身元が分からないのは事実だ。俺の事を思ってくれるんなら今は堪えてくれ、頼む……。」

アムロはどうやら落ち着いてくれたようだったので、俺はアムロを解放した。

アムロは無言のまま艦長室を出て行き、妙な空気になった。

俺はこの世界で、自分で選んでWBに乗った。でもそれは同時にWB内の空気も変えるものだった。これからWBはどうなっていくのだろう……。

俺は内心不安でいっぱいだった。

## 赤い彗星の脅威（後書き）

基本的には主人公の一人称で書き、場合によってはアムロやシャアの視点で書きたいと思っておりますが、作者からの視点で書いたほうが分かりやすいでしょうか？

どうか、この小説を読んでくださる方、ご意見ください。

## 補給艦撃墜作戦（前書き）

WB初の本格的対艦先頭です。今回もよろしくお願いします。

## 補給艦撃墜作戦

ムサイ級旗艦型軽巡洋艦ファルメル

ここではレーザー回線をつないだシャアがドズルからの補給に関する報告を受けている。

「パプア補給艦？あんな老朽艦では十分な補給を得られません。それにザクの補給は……。」

「現状を考えるのだ。十分な戦力で戦える昔とは違うのだぞ。貴様ならザク3機も送れば、ムサイを失ってでも敵のV作戦をの機密を手に入れられるはずだと踏んだのだ。期待を裏切るなよ？」

「しかし、連邦軍のMSの性能は今送ったデータの倍はあると考えますが……。」

「シャア、同じ事を二度も言わせる気か？」

「ハッ……。」

レーザー回線が途絶える。シャアは困惑しているようだが、その視線はマスクからは確認はできない。

「ザク5機の補給を要請したのに補給は3機、補給艦はくたびれた老朽艦、連邦軍のMSに対しては要求した物資の補給でも足りないぐらいだというのに……。」

作戦を考え直さなければならんな……。シヤアは一人呟く。

ルナ2へと向かうWB。レーダーが何かをキャッチする。

「シヤアのムサイに接近する船があります。」

「何。戦闘艦か?。」

WBのキャプテン、ブライトが報告を聞き、確認をとる。

「いえ、これは……。補給艦のようです。」

「物資を失って、補給に入ったシヤアなら私達も対等に戦えるかもしれないわ。」

WBの操舵手、ミライ・ヤシマが意見を出す。

「しかし、こちらはまともな戦力など持っちゃいないのだぞ。」

「でも、シヤアが今補給を受けるといふ事は私達がルナ2へ入る前に補給を終わらせて、私達の所に攻撃を仕掛ける余裕があるからじやないかしら?もしシヤアが本気で攻撃を仕掛けてきたら、防ぎきる自信がある?、ブライトさん。」

「そう思わせる罠だとも考えられるが……。アステル貴様はどう見る。」

「ミライさんの意見に賛成です。現状の状態でシヤアが本気で攻撃してくればおそらく防ぎきる事は難しいと思います。それに補給を

潰す事ができれば、それだけ俺達も余裕ができます。WBの今の状態から考えても、決行するべきだと思います。」

「ふむ、ならば後は・・・、ミライさん、ブリッジに全員を召集してくれ。戦闘員達にも今回の作戦を諮りたい。」

WB全域にすぐさま命令が届き、アムロを始めとしたパイロットとWBのクルーがブリッジに集合する。

「本来なら一人一人意見を聞きたい所なのだが、時間がないので多数決を採る。まず、このままシャアから逃げ切ってルナ2に逃げ込んだ方がいいという者。」

後方からちらほら挙がる手がある。

「では、シャアの補給の隙をつき補給艦を潰して、シャアへの補給を実行不能にした上で、そのどさくさにまぎれてルナ2へ退く。この案に賛成の者。」

俺やアムロ、パイロット候補生のリュウさんを始めたWBのクルーのほとんどの手が挙げられる。最後にブライトも手を挙げ、この作戦に決まる。

「ふむ。では、この作戦を採る。アムロ、アステルはガンダムで出撃。リュウはコアファイター。ハヤトとカイはガンタンクで待機。いつでも出撃できるようにしておけ。メガ粒子砲スタンバイ、WB 180度回頭！」

WBがシャアのファルメルに向かい、向きを変える。

「アステル・ロア、プロトガンダム出る。」

「アムロ、行きまーす。」

「リュウ・ホセイ、コア・ファイター出るぞ。」

順に射出されるMS、戦闘機、シャアのファルメルの姿がぼんやりとだが見て取れる。俺はアムロのガンダムとリュウさんのコア・ファイターの後に続いた。

パプア補給艦。

一年戦争開戦時点で既に旧式化している補給艦だ。艦の様子を見れば、使いこまれ老朽化しているのが見て取れる。

「よくもこのようなくたびれた艦が現役でいられるものだな。」

パプア補給艦を見て、シャアが呟く。

「ドレン、映像回線を開け。」

「ハッ。」

映像回線がパプア補給艦艦長ガテムにつながる。切り出したのはシヤアのほうだった。

「ザク5機を要求したのに3機、それも物資の補給も十分ではないな。」

「ワシにいうな、上に言え。上のお偉いさん方も苦勞しているという事さ。だが、持ってきた物資は何があっても渡してやる。」

「そうでなければ困る。ハッチ開け。パプアとのドッキング、急げ！」

ドッキングパイプがファルメルに接続され、補給の受け取り体制が完了する。

そのころアステル達はリュウのコア・ファイターを先頭にアムロのガンダム、アステルのプロトガンダムの順でファルメルの目の前まで来ていた。リュウがコア・ファイターを加速させファルメルが見ることができる場所まで直進しようとする。それを見咎めたアムロとアステルはすぐにリュウに合図をだして、うながす。

「行くなというのか。敵は目の前だぞ。」

「正面から攻めるのではなく、回り込んで攻めましょうリュウさん。」

アムロに代わって俺が答える。

隕石を影に回り込みながら、太陽が背になるように進むとぼんやりとしか見えていなかったファルメルと、それに繋がっている補給艦の姿が見てとれる。

アムロがハイパーバズーカをコンベアパイプに向けて撃つ！それに伴い、爆発するコンベアパイプ。

「コンベアパイプをやられた。船をファルメルから放せ！」

「ガデム、運んできたザクを放出しろ。」

「ああ、何とかしよう。」

「アツシユ、マチユウ、フィックス。ザクに乗り込む準備をしておけ。私は先にザクで出る！」

そのときファルメル、パプアに再び衝撃が走る！プロトガンダムとガンダムがそれぞれの艦にバズーカを命中させたのだ。

「アムロ、シヤアがくるぞ！」

「分かつてる……、来た。」

シヤアがこちらに突っ込んで来る！

「ふふ、MSの性能の違いが戦力の決定的な差では無いと言うことを、教えてやる。」

ザクが視界から消える！

いつのまにか後方に回り込まれていた。

捕まった！しかし羽交い絞めにされたプロトガンダムは、バーニアを点火、さらに拳をおもいきりぶつけてザクを引き剥がす。

「ええい、連邦軍のMSは化け物か！」

ザクが一瞬ひるんだ隙について、ガンダムがハイパーバズーカを撃つ！しかし弾速の悲しさ、シヤアは最低限の回避運動であっさり回避してしまつ。

「ふふふ、さらばだ。不慣れなパイロット達め……。」

ザクがヒートホークを構え、こちらの様子を窺う。

しかしシャアは突然、武器をザクマシンガンに持ち替えたかと思うと、牽制用にザクマシンガンを放ちながら突如、母艦に後退していった……。

シャアが母艦に引き上げたのはドレンからの通信のためであった。

「シャア少佐、お戻りください。ファルメルはメガ粒子砲が補給中で使用できないため、ろくに反撃もできず……。」

「何だと！今行く、私が行くまで何とか持たせる。」

チツ、運のいい連中だ。次こそ落としてやる、必ずな！

シャアは痛恨の思いでファルメルに引き上げていく……。

WBは補給中のためメガ粒子砲が使えず、物資が尽きているためミサイルでの反撃もろくにできないファルメルをほとんど一方的に攻撃していたが、メガ粒子砲でとどめを指す事はできずにいた。リュウがパプア補給艦、ファルメルを交互に攻撃し、その間を動かかなかつたからだ。

「リュウの奴、あれじゃあこっちの主砲が撃てねえじゃねえか。ハヤト、ブリッジに伝える。リュウにどけてな。」

「待ってください。ブリッジに連絡する方法は・・・、これだ。」

ハヤトがブリッジにカイの言葉を伝える。ブライトはすぐさま回線をリュウに繋げるが回線が切られているのか繋がらない・・・。

そこでブライトはガンキャノンに出撃命令を出す。

「やむをえん・・・。ハヤト、カイ、ガンタンク出撃。近づいて補給艦を狙え。」

「了解。」

ハヤトの短い返事とともにガンタンクがよたよたと敵のパプア補給艦へと近づいていく。しかし、ファルメルもパプア補給艦もWBに気を取られ、全く気が付いていない。あと10メートル、5メートル、1メートル・・・!。

停止したガンタンクから120mm低反動キャノン砲が発射され、パプア補給艦に命中する！それと同時にパプア補給艦は今のが致命傷だったのか物資をばらまきながら沈んでいく・・・。と、同時にMS-05ザク?（以後、旧ザクと呼称）が飛び出してくる!。

ザクとともに大量の物資がばらまかれていく・・・。

「大概の物は放出したはずだ。敵を倒したら収容してくれよ。」

ガダムは言い放つと先行していたガンダムの姿を見つける。

「あれか。連邦軍の作ったMSってのは！」

ガンダムに向かっていく旧ザク、しかしシャアの赤いザクがそれを止める。

「ガデム、落ち着け。」

「ワシの船をやられたんだぞ。ワシとこのザクとて百戦錬磨の戦いを潜り抜けてきたのだ。にわか作りの連邦軍のMSなど、ワシの敵ではないわ！」

「ガデム、そのザクでは無理だ。止める！」

しかしガデムはその制止を振り切り、ガンダムに突進する。

ビームサーベルを旧ザクの目の前で振るガンダム。しかし、旧ザクはその動きを完全に見切っており突進の重心をほんの少しずらしただけで回避し、シオルダータックルをガンダムの胴体にくらわせる。アムロはコクピットの中で昏倒しそうになった。が、持ち直してビームサーベルを旧ザクの胴体に切り込ませてゆく。もういいだろう。旧ザクを蹴飛ばし、退がるガンダム。

「れ、連邦軍はあれほどのMSをか、開発したのか。う、うおおお。」

爆散する旧ザク。それを眺め啞然となるシャア。

「パプアがやられ、ガデムが死んだ。連邦軍の新型兵器の前に我らはことごとく敗北した。それは分かる。しかし、それらを運用する

あの連中はパイロットも、戦術もまるで素人だ。これはいつたいうことなのだ。」

連邦もジオンもなり振り振りかまっていられんということか。そう言い放つとシヤアはパプアを落とし、引き上げていくWBを物不思議そうに眺めていた……。」

プロトガンダム、ガンダム、コアファイターからアステル、アムロ、リュウが降りて、ブリッジへ上がる。

「すまんなあ、ブライト。俺、回線切っていたみたいで。」

ああ、気をつけてくれよと言リュウに言うと、ブライトは俺とアムロの方に向き直り、言った。

「アムロ、アステルお前達は敵の後ろに回り込みすぎだ。」

「いや、あれはあれでいいんだ。」

リュウが間に入る。

「そうです。あれはシヤアが早すぎたんです。」

「シヤアの動きは俺達の予想を超えていました。」

俺達の言葉を聞くと、ブライトは俺とアムロに向けて言い放った。

「シヤアは赤い彗星と呼ばれる男だ。これからは、いままでの戦いを踏まえて、もっと戦い方を考えて戦うんだ。」

「はい!」

俺とアムロの返答がかぶる。こんな時なのに俺は逆に何も言われなくてほっとしていた。毎回あれではさすがに身が持たない。それにあれはブライトなりに考えて俺達に贈った言葉だと思えた。横でリユウさんに文句をいうアムロを眺めながら、こついうのも悪くない…。俺はそう感じ始めていた。



## 補給艦撃墜作戦（後書き）

今回は、WBと主人公達を同時に書いて、対艦戦闘と、MS戦闘を同時進行で行う事に挑戦しました。まだまだ至らない所も存分にあると思いますが、どうかよろしくお願いします。

## ルナ2（前書き）

今回はルナ2です。よろしくお願ひします。

## ルナ2

ムサイ級旗艦型軽巡洋艦ファルメル

この艦の艦橋には赤い軍服と仮面をつけた男シャア・アズナブルがルナ2を眺めて微笑を浮かべ、軍服を着た小太りの男ドレンがそれに迎合している。

「敵もよくよく不運だな。この宇宙では逃げ込む拠点などはルナ2しか存在しない。それにこのルナ2の指令は・・・、ドレン、私達はついているぞ。」

。「この指令はワッケイン・・・、なるほど少佐もお人が悪い・・・。」

「ドレン、言うようになったな。そうだ、連邦軍の宇宙に存在する唯一の拠点ルナ2、それに対して我らはファルメル一隻、指令はワッケイン、ここに付け入る隙がある。」

「直接乗り込むつもりですか？」

「当然だ。おそらく木馬を運用した者たちは全員、あるいはほとんどが拘束されているだろう。これほどのチャンス逃すつもりなど無い。」

「第一目的連邦軍のMS、第二目的木馬。手にいらずんば撃破するのみ。以上。」

突撃部隊を召集し、それだけ伝えたと、シャアはルナ2へと潜入し

ていった・・・。

WBはルナ2へ着艦した。しかしそこで待っていたのはルナ2指令ワッケインの容赦ない採決だった。

「WBに搭乗して避難してきたサイド7の方々は地球連邦軍本部の指示を仰いで、しかるべき艦でただちに地球へ移動してもらうことになります。ただし、ブライト・ノア、ミライ・ヤシマ、リュウ・ホセイ、セイラ・マス、カイ・シデン、ハヤト・コバヤシ、アステル・ロア、アムロ・レイ以上の者は軍のトリプルAの秘密、すなわちホワイトベースとガンダムを使用した罪により身柄を拘束、軍事裁判にかけられるものと思え。ホワイトベースは没収、ガンダムは封印して軍の管轄下に戻す。以上だ」

「身勝手じゃありませんか。サイド7がどういう状態だったか調べもしないで、よくもそんなことが言えますね」

「それにシヤアは、必ずここに攻めてくると思います・・・。」

アムロの反論にアステルが続いて意見する。

「民間人如きが、馬鹿も休み休み言え。赤い彗星といえは名立たる戦士だ。その彼がムサイごとき軽巡洋艦でこのルナ2に挑むような馬鹿な真似をするはずが無い。」

「違います。私とここにいるアムロ・レイはシヤアと何度か戦ってきました。その経験から言えるのです。シヤアなら拠点ルナ2に対してファルメル一隻、ここに付け入る隙がある。そう考えて行動するだろうと・・・。」

「民間人の戯言だな。士官候補生と民間人ごときには、戦略をうんぬんする資格も無ければ、軍人の戦略を理解する事もできん。」

「あなたは赤い彗星の恐ろしさを知らないんです。」

ブライトが続ける

「まだ言うのか。もういい、者ども彼らを拘束して別室に閉じ込めておけ。」

俺達はその場で拘束される。

監禁された部屋で食事を持ってきた連邦軍兵士に対してブライトが非難の声をあげている。

「ワツケイン指令に合わせるんだ。」

「無駄です。ブライトさん、ここで合わせてくれるのなら俺達は最初から拘束されていません。」

「しかし、シヤアは……。」

「ええ、必ず来ます。しかしこのままじゃ……。」

「アステル……。」

俺とアムロが虚しさに打ちひしがれる中、カイさんとリュウさんは食事を手に取り、それぞれにこちらを諭す。

「それより、腹がすいちゃしょうがないぜ。食べられる時に食べて

おかなけりゃ、いざって時に何もできないぜ、逃げることだってな」

「カイ・シデン君の言う通りだよ、アムロ、アステル。食事は銃に弾を詰めるみたいなものだ。兵士は食べたくなくても食べなきゃいけない。」

「……。」

しかし、俺とアムロは食事を手にしつつ、呆然とするしかなかった……。

その頃、シヤアを筆頭とした突撃部隊はすでにルナ2の侵入口……、つまりはWBが収納されている場所まで来て、まさに侵入しようとしている所だった……。

「む？」

侵入口をスコープで見ると赤外線探知機が無数に仕掛けられている。

「少佐、行きますか？」

「待て」

シヤアがはやる部下を抑えて、スコープをかけさせる。

「見る」

「おっ、こ、これは？」

「赤外線探知機だ。あれにひっかからんように機雷を仕掛ける」

「は」

突撃兵が機雷を仕掛ける。機雷が爆発し、電源部分が落ちる。それは赤外線探知機の無効化を意味していた……。

アムロがガンダムのシステム、それによる強さを皆に説明している。たびたびガンダムの整備をしている俺にとってはすでに知っている知識だが皆と共に聞いている。

アムロの説明は上手い。実能的を得ている。もし、同じ事を質問された時、俺はこんなに上手く説明ができるかな……。そんな事を考えていた、その時！

近くで爆発が起きたらしい。俺達は部屋の隅に投げ出される。

シャアだ、シャアが来たんだ。アムロの顔を見やれば俺と同じ事を考えているらしい。それに……。遠心重力装置が切れたって事は……。俺はとつさにブライトに向かって叫んだ。

「ブライトさん、電源が切れたって事は電子ロックも外れてるといふ事です。ここにいてもどうにもなりません。どさくさにまぎれて脱出しましょう！」

「ミライさんとセイラさんは？」

アムロがブライトに尋ねる。

「隣の部屋にいるはずだ。」

隣の部屋をこじ開けると、はたしてミライさんとセイラさんの姿がある。ブライトの姿を確認した二人は部屋から脱出する。

ミライ、セイラと合流したWBメンバーはWBへと急いだ。

アステル達がWBの入り口に着くと、フラウ・ボウが連邦兵士に避難民の処置について意見している。

「戦闘が始まっているのに、なぜあたしたちを安全な場所へ避難させてくれないんですか？」

「司令からは何の連絡も来ていない。司令の許可なしに君達をどうこうする事は我々にはできないのだ。」

「じゃあ、私達にこのままここで死ねっというんですか？」

「そ、そうは言っていない。」

「じゃあ、早く司令と連絡をとってこの状況を何とかしてください！。」

何と、煮え切らない返事だろう。私達はこれからどうなると言っのか。

フラウ・ボウがそんな事を考えていると、アムロが物陰から合図を出す。キツカが反応し、連邦軍兵士の足を思い切り踏み付ける。

連邦軍兵士の注意がキツカに向いた瞬間！ブライト、続いてアムロが連邦軍兵士に当て身をして、気絶させる。

成功だ！WBに乗り込む事に成功した俺達にブライトが矢継ぎ早に指示を出す。

「仲間を集める。ホワイトベースを港から出すんだ。アムロ、アステルお前達はガンダム2機の封印を解け」

「はい！」

俺達の返事がかぶる。そして俺達はガンダムの封印を解きにそれぞれの場所へ急いだ。

シャアの侵入を許したワッケインは後手に回らざるを得ず、マゼランを起動する所であった。シャアはもちろんそれを別の場所から見ている。シャアはどうやらこれを見越していたようである。

「いくぞ。」

シャアは部下と共にさっさとその場を離れてしまう……。

マゼランが起動、微速前進し、出港しようとしたその時！シャアが仕掛けたのである。各所に仕掛けられた爆弾が爆発し、マゼランが横転する。それだけでは無い。どうやら体積の問題上、出港位置に詰まってしまったようだ。

悔しがるワッケインだが、もはや手遅れだった……。

出港準備を進めるWB、ブライトが目目の前の光景を目にして思わず啞然となる。が、すぐさまクルーに指示を出していく。

「エンジン始動、機関急げ」

「リュウ、カイ、アムロ、アステル、ガンダムの封印は解けたか？」

「怒鳴りなさんな、今始まったばかりじゃないですか」

カイさんがいつもの調子で答える。

「…、セイラ、避難民は？」

「今、重力ブロックに移動中です。フラウ・ボウが指揮してくれます」

「よし、僕もガンダムの所へ降りる」

「ミライ、エンジンパワーが臨界に達したら微速前進だ」

「はい」

ワッケインが脱出艇でWBに向かう。WBに入り、唐突に喋り始める。

「貴様ら、ここで何をしておるか？、WBは立ち入り禁止を厳命したはずだ、すぐに立ち去りたまえ。」

俺は少々呆れたが、反論する。

「まだ、そんな事を言ってるんですか。いま大事なのはシャアを何とかする事でしょう。」

「貴様らはなぜ軍規が必要なのか、まるで理解していない。」

これに対しては、ブライトが応えた。

「反逆罪は覚悟の上です。ワツケイン司令、あなたの敵はジオン軍なんですか？それとも私達なんですか？」

「何だと？」

俺は最後に言い残す。

「軍規軍規、そんなものが何だって言うんですか。軍人が軍規にのっとって軍人として死ぬのは勝手でしょう。でも、守るべき民間人を巻き添えにして殺してまで軍規を守ることには何の意味があるんです？ワツケイン司令」

ワツケイン司令は少々の沈黙の後、切り出した。

「・・・マゼランを排除する。ただし、君達は素人だ。今回だけは私が指揮を執る。」

これがこの人にとっての最大の譲歩なのだろう。俺達は素直に従う。

「ホワイトベースをこの場で固定。各艦防護体制をとれ。主砲スタンバイ」

「はい」

「防護壁降ろせ。照準、マゼランの熱核反応炉。各自、衝撃に備える」

MSで出撃したアステル達は、シャアの部隊ザク3機と戦いを繰り広げていた。

シャアは出撃してくるMSに対して驚愕の声を挙げる。

「まさか、あのワッケインがWBとガンダムを使用してくるとは・  
・。ええい、よもやこんな事が起ろうとは！しかし、こちらとてま  
だ負けたわけでは無い」

ザクマシンガンが聞かぬと分かっているからか最初からヒートホークを構え、ガンダムに振り下ろすシャアのザク（以降シャアザクと呼称）

盾を構えるガンダム、ビームライフルでザクを一機撃破した俺はアムロに向かって叫ぶ。

「だめだ、アムロ！。その武器は盾も切り裂く、かわせ！」

アムロは機体にスウエーバックをかけるが間に合わず盾を溶断するヒートホーク。

そこで、ビームサーベルを抜き、シャアザクと激しく打ち合うガンダム。その後ろから迫るもう一機のザク。それをリュウさんのコアファイターが牽制した所を俺がビームライフルで撃墜する。

激しく打ち合っているが、アムロの方が若干押され始めている。

アステルも加勢に入ろうとシャアザクの後ろに回ろうとした・・・。

その時、ブライトの声がこちらに届いた。

「アムロ、通路の前からどくんた。」

「エツ？」

戸惑いながらも左方向に機体を移動させるアムロ。主砲がマゼランの熱核反応炉を攻撃し、爆散するマゼラン。その余波が当然シャアザクにも襲い掛かるが、機体を上方方向に移動する事で回避する。哀れだったのはファルメルの方で直撃こそしなかったものの、軽微とはいえダメージを受けてしまった。

。 それをみて、シャアはすぐさまファルメルへと引き上げていく……。

再びルナ2より出港するWB

ルナ2からそれをなにか懐かしむような眼で見つめるワッケイン司令だった……。





## ルナ2（後書き）

今回もがんばって書きましたが、こんな感じですよ。読んでくれる方はどうか見放さず、見守ってください。

## 大気圏突入（前書き）

次の話から少しずつ歴史をずらそうと思っています。（大筋は変わりません。）

## 大気圏突入

ペガサス級強襲揚陸艦WB

この艦は今まさに連邦軍本部ジャブローに進路を取り、大気圏突入をしようとしていた。

「大気圏突入25分前。」

「ミライ、自信はあるのか。」

「スペースグライダーで一度だけ大気圏に突入したことはあるわ。けどあの時は地上通信網がきちんとしていたし、船の形も違っけど。」

「基本航法は同じだ。サラミスの指示に従えばいい。」

「私はシャアがこのまま引き下がるとは思えないの。」

「ミライ・・・、しかし今は大気圏突入に専念してくれ。」

その時サラミスから無線で通信が入る。

「若造、聞こえるか？」

「は、はい、リード中尉。」

「大気圏突入準備はいいな？我々はサラミスの大気圏突入カプセルで行く。そちらとはスピードが違う、遅れるなよ。」

「はい、了解しました。」

「ミライ、大気圏突入の自動操縦に切り替え、以下、突入の準備に備えるんだ」

「了解」

「シャアのムサイは？」

「変わりません。しかし接近する物があります。」

「また補給艦か？」

「いえ、そのような反応ではありません。これは……、MSではないでしょうか？」

「何……、先に潰した補給艦の補給か……。……アムロ、アステルの両名はガンダムで待機。ザクとの戦闘もありうる。各員そのつもりでいる。」

ミライの言う通りシャアは大気圏突入途中に攻撃してくるのか、ブライトは命令こそ下した物のはつきりと判断はできずにいた。

その頃、シャアはミライの考えている通り、大気圏突入の際を狙って攻撃するという前代見聞の作戦を敢行しようとしていた。

「あらたにザク3機の補給が間に合ったのは幸いである。これより大気圏を突破しようとする木馬に奇襲攻撃をかける。第一目的は木馬に攻撃を仕掛け、軌道をずらすことで木馬の大気圏突破を阻止する事。」

第二目的は相手のMSの目をこちらにそらし、相手のMSを木馬に

帰還させず、大気圏の摩擦熱で葬り去る事。

しかし、我らとて条件は同じだ。戦闘時間は2分とないだろう。しかし、君たちならばこの前代未聞の作戦を遂行できるはずだ。諸君らの検討に期待する！」

そして、シャアの部隊はWBへと進撃を始めた……。

緊張状態にあったWBにけたたましく警報が響く。やはり来た！待機していた俺達に出撃命令が出る。

ガンダムをカタパルトに乗せていた時、俺とアムロにセイラさんから通信が入る。

「4分以内にWBへ戻るのよ。さもないと大気の摩擦熱で焼け死ぬわよ。」

「了解。」

俺とアムロは同時に返事を返す。

「ザクは5機です。」

「5機のザク？聞いてませんよ。それに補給は完全に叩き潰したはずでしょう。」

「どうやら、補給物資だけは受け取っていたみたいなの。申し訳ないけど事実と受け止めてちょうだい。大丈夫、あなた達ならできるわ。」

おだてないでくださいとアムロが返すが、俺は自分が知っている知識以上に、この一言に確実さを覚えた。言葉では表しにくいのだが、

この状況でも常に正しい方向を見ている。セイラさんにはそう思わせられる力があるように感じた。

「アステル・ロア、プロトガンダム出る。」

「アムロ、行きまーす。」

順番に射出され、後方を見るとファルメルにシャアのザクを先頭に合計5機のザクが見える。

「やはり、MSが出てきたか。ドレン、援護しろ。我々は二手に分かれて攻撃を開始する。」

「了解。」

まず、プロトガンダムに2機のザクが接近してくる。しかし、一機はWBに攻撃を仕掛けようとする。しかし左舷から機銃が放たれ、接近できないようである。残りの一機はこちらに向かってくる。

だが、アステルはプロトガンダムを動かさない。アステルはシャアの戦い方を見ているうち、あの戦闘方法がエース用にカスタマイズされたS型のザクだからこそ行えるものだと気付いた。ならば、プロトタイプ特有の強力な推進力を持つガンダムでも可能なはずだ。  
・  
・  
・

敵が間合いに入り、ザクマシンガンをホークに持ち替えた瞬間！プロトガンダムは瞬間的に左方向にスライド移動したかと思うと後ろに立ち、ヒートホークを空振りさせていたザクのコクピットをビームサーベルで貫いた！

「そ、そんなぐわああ。」

まずは一機。そうして俺はWBに近づけないザクを放っておいてシヤアと戦うアムロの方へ向かった。

ガンダムがガンダムハンマーでシヤアザクを狙う。しかし。シヤアもまたヒートホークを繰り出し、ガンダムを攻撃するがみなスウェーバックでかわす。双方一息も気が抜けない戦いを繰り広げていたが、こういう場では戦い慣れしているほうが有利である。アムロが若干プレッシャー負けしている。

「あのパイロット腕が上がってきているようだ。やはりここで始末する！」

シヤアザクがヒートホークで必殺の一撃を繰り出そうとしたその時、ガンダムの後方に迫るザクがある。

しかし、ガンダムは左腕のガンダムハンマーをザクにぶつけ、右腕で盾をシヤアザクに投擲した。その結果、ザクは爆散し、シヤアザクは誤認して盾を切り裂く。次の瞬間アムロはランドセルからビームサーベルを抜き、シヤアザクに向けて振るうが、これはシヤアもスウェーバックで回避する。

そのとき、シヤアにドレンから通信が入る。

「シヤア少佐、時間です。カプセルに入ってください」

「よし、ハッチ開け」

「クラウン、コム充分だ。敵のMSはすでに木馬に戻る時間は失っている。まっすぐにカプセルを目指せ。」

「無線が回復したら大陸のガルマ大佐を呼び出せ」

「ようやくわかりましたよ、シャア少佐。よしんば大気圏突入前に敵を撃ち漏らしても、敵の進入角度を変えさせて我が軍の制圧下の大陸に木馬を引き寄せる、二段構えの作戦ですな」

「戦いは非情さ。そのくらいのことは考えてある」

シャアが退いた後、アステル達は残ったザクを相手にしていた。

「これで終わりだ！」

アムロのビームサーベルがザクを袈裟斬りにする。しかし、もう一機のザクは動きが速くて追いつかない。待てよ。動きが速いって事は、まさか……。

そのまさかだった。プロトガンダムとガンダムは先にいるザクと共に地球の重力に引つ張られて、大気圏に入ってしまったようだ。セイラさんの声が悲鳴のように響く。

「アムロ、アステル、タイムオーバーよ。WBに戻って！」

しかし、地球の重力という物は厄介な物で、もがいても、もがいても引きずられてゆく。このまま大気圏で燃え尽きるのかな、そう思ったときだった。

「……………」

え、この声ってもしかしてあの時の……。

しかし詮索している時間は無かった。プロトガンダムは本来コアブロックシステムがついていないため大気圏突入機能など存在しないはずなのだが、俺は声の言う通りプロトガンダムを自ら大気圏に突入させる。

すると、プロトガンダムは謎の光に包まれたかと思うと、大気圏突入機能を使って大気圏を突破したガンダムと共に地上に降り立っていた。

WBから皆の声が聞こえてくる。

「よし、アムロ、アステル聞こえるか？」

ブライトの声……

「アムロ、アステル、無線が使えるはずよ。アムロ、アステル、応答してください。」

セイラさんの声

「映像回復します」

「ガンダムです」

「アムロ、アステル」

フラウ・ボウの声

「奴らめ、あとで締め上げなければならんが、このモビルスーツがあれば連邦軍はジオンに勝てる」

「はは、こんな時にもそれですかブライトさん……」

「無線回復、着艦します。」

「感度良好。アムロ、アステル、うしろの上部甲板にでもどうぞ」

「了解」

アムロとアステルは同時に返答し、上部甲板に着艦した。

今回はさすがに死ぬかと思った……。けどあの時の声は一体、何なんだ……。

俺がそんな事を考え、呆然としていると今度はブライトの悲痛な声が聞こえてくる。どうやらこの大気圏突入は失敗だったようだ。リード中尉がおもむろにブライトを責め始める。

「ブライト君、これではなんの意味もないではないか。」

「ええ、そう思います。ここはジオンの勢力圏内ですから。シャアは戦術に長けた男です。我々はシャアにはめられたんです。」

「どうするというのだ。」

「近隣の連邦軍に補給、応援を頼みましょう。だめならば現状の戦力で突破するしかありません。」

「冗談じゃない・・・!うう」

リード中尉は傷をおさえて倒れてしまう。セイラさんが駆け寄って手当をする。

こうして俺達はジオンの勢力圏で戦っていく事になった。

しかし、この時俺はこの戦いが本来の歴史より大変な事になるだなんて気づくよしも無かった・・・。

## 大気圏突入（後書き）

主人公の特別な力が出ました。これがどのような力かはもっと後に書いていきたいと思えます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8507z/>

---

機動戦士ガンダム～小さなニュータイプ～

2012年1月14日03時45分発行